

第四十表 櫻島噴火

舊記ノ分ハ三國名勝圖會、福島嚴之助氏編書中「櫻島燃ル記」、島津家ヨリ幕府ニ差シ出ダサレタル數回ノ届書、垂水ノ老臣伊地知季虔ノ櫻島燃之記、薩藩ノ知學事山本正誼ノ櫻島炎上記、玉龍山續年代記、櫻島燃繪圖ノ記事、櫻島上山一藏年代記、藤崎萬十廣次櫻島燃上覺書、木脇氏藤原姓略系圖、善左衛門覺書、中原盛房書簡、橘南谿西遊記等ニヨリ編纂ス。大正三年大噴火ノ記事ハ震災豫防調査會歐文紀要第八卷ニヨル。又(*)ヲ附セル七回ハ日本災異志ニヨル、小噴煙、降灰ニ止マリシモノナルベシ」櫻島ハ向島トモ稱セリ。

年月日	同上(西曆)	記事
應仁二年	一四六八年	櫻島山上ニ火ヲ發ス。
文明三年九月十二日	一四七一一年	向島黑神村神火燃、大石ヲ飛バシ砂ヲ雨ラス、其燒石堆積シテ岩丘トナル、土人呼デ燃崎トイフ。
同 五年四月	一四七三年	噴火(*)
同 七年八月十五日	一四七五年	向島野尻村神火燃、沙ヲ雨ラシ燃崎トナル。
同 八年九月十二日	一四七六年	向島大ニ燃出ス、此五日以前ヨリ大地震ス、是ニ至リ岳上燒崩シ、沙灰近國迄大ニ雨ルコト七日許ナリ、其十九日ニ及ンデハ未刻(午後二時頃)ヨリ眞ノ暗夜ノ如シ、當島ノ西南地湧出シテ本島ニ連ル、其周廻二里許ナルベシ、是今ノ燎崎(燃崎)ノ事ナリト云フ、炎石沙石ノ爲ニ居舍埋沒

年月日	同上 (西曆)	記事
寛永十九年三月七日	一六四二年四月六日	シ人畜死亡セシコト其數ヲシラズ。 七日ノ晚向島神火燃。
延寶六年正月九日	一六七〇年三月一日	噴火(*)
寶永二年十二月	一七〇六年一月一日	噴火(*)
寛保二年三月二日	一七四二年四月六日	噴火(*)
寛延二年八月	一七四九年九月一日	己巳八月向島野尻村ノ上大平山焼ル。
寶曆六年	一七五六	噴火(*)
明和三年四月二十八日	一七六六年六月五日	「夜明ニ鳴物イタシ大地震間少シヅ、有テ小地震三度ユル、同六月二十一日(太陽曆七月二十七日)夜八ッ前ヨリ八ッ時頃迄(午後十時頃)鳴物九度、地震七度ユル、内ニハ大震」云々。
安永八年十月一日	一七七九年一月九日	大破裂ノ概況 天氣快晴靜穩ナル際ニ發シタリ、破裂ノ「前キ搖レ」タル地震ハ既ニ九月二十九日午後六時頃ヨリ發起シ極メテ頻繁トナリ、翌十月朔日ニ及ビ晝ヲ過グルモ衰ヘザリキ、其ノ朝ヨリ濱邊ノ井水沸キ騰リテ流水ノ如クニナリ海水ハ紫色ニ變ジタリ、鹿兒島ニテモ二十九日午後八時乃至九時ヨリ地震絶ヘズ、斯クテ十月朔日ノ午前十一時頃ニ至リ、破裂ノ第一次現象トシテ先ヅ舊噴孔ノ一ナル南嶽ヨリ白煙ヲ射出セシガ次ギテ午後二時頃南嶽下、有村上ナル燃之頭ト稱スル邊ヨリ黒煙ノ大噴出アリ高ク三里ノ上空ニ迄テ直射セラレタリ、甚シキ爆音ヲ發シ、煙中ニ無數ノ電光ヲ閃カシ茲ニ愈々大破裂トナレリ、午後四時頃ニ至リテ更

ニ東北ノ巔ニシテ高免村ノ上、瓶掛ノ邊ヨリモ燃出ルニ及ベリ、而シテ噴火ガ甚シク勢力ヲ加ヘタルハ破裂ノ始メヨリ約十二時間ノ後、即翌十月二日早朝ニシテ櫻島二俣村ニテハ二日ノ午前五時頃ヨリ火石ノ落下ヲ見ルニ至リ、鹿兒島ニテハ同日午前五時頃ヨリ鳴動特ニ甚シクナレリ、蓋シニ日朝ヨリ噴火ハ爆發的活動ノ最盛時期ニ入りタルモノニシテ、之ニ次ギテ鎔岩ヲ流出スルコト、ナレリ。

破裂ノ勢力ガ盛ナリシハ十月一日、二日ニシテ垂水方面ニテハ三日四日ハ煙モ稍々薄ラギ、八日以後ニ及ビテハ空モ次第ニ鎮マリタリ、鹿兒島市中ニテハ十月四日始メテ降灰アリ、午前十時ヨリ午後二時過ギ迄デハ暗夜ノ如クナリキ。

安永八年大噴火ノ死者ハ官府ノ調査ニヨレバ百五十三人トアリ、櫻島燃亡靈等碑文ニヨレバ、古里ニ六人、有村ニ五十七人、脇村ニ三十四人、瀬戸村ニ四十六人、黒神村ニ五人ニシテ合計百四十八人トすル、高免村(向面或ハ向免)ニハ一人モ死者ナカリキ。

新島ノ涌出 安永八年十月十四日一島涌出ス、向免村ノ地ヲ距ルコト三町、其南北五十七間、東西五十間、高サ一間三尺許、翌年七月朔日水中ニ没シテ今見ヘズ、之ヲ一番島ト云フ。十五日又一島涌出ス、一番島ヲ距ルコト東方約一町十六間、向面ノ地ヲ距ルコト約四町半ニアリ、崑島ニシテ之ヲ二番島ト云ヒ俗ニ猪子島ト稱ス、己亥十月化成ノ故ナリ。十一月六日夜又一島涌出ス、二番島ヲ距ルコト南々東ノ方十五町、向面ノ地

年月日

同上 (西曆)

記事

安永九年八月十一日

一七八〇年 九月 九日

ヲ距ルコト約三十町ニアリ、崑島ニシテ之レヲ中之島或ハ三番島ト云フ
 十二月九日夜又一島涌出ス、三番島ヲ距ルコト南ノ方約六町、向面ノ地
 ヲ距ルコト約二十三町ニアリ、崑島ニシテ之ヲ四番島ト云フ。硫黄ノ氣
 アルヲ以テ俗ニ硫黄島ト稱ス。九年庚子四月八日二島並デ涌出ス、五月
 朔日ニ至リテ自ラ合シテ一島トナル四番島ヲ距ルコト南西ノ方十四町餘
 向面ノ地ヲ距ルコト約十二町ニアリ、之ヲ五番島ト云ヒ、今安永島、新
 島、若クハ燃島ト稱ス。六月十一日又一島涌出ス、五番島ヲ距ルコト北
 東ノ方十四町餘、向面ノ地ヲ距ルコト約十町ニアリ之ヲ七番島ト云フ。
 九月二日又一島涌出ス、六番島ノ北東ニアリ之ヲ七番島ト云フ。十月十
 三日又一島涌出ス、七番島ノ南東ニアリ、之ヲ八番島ト云フ。後七八ノ
 兩島ハ自ラ合シテ一島トナル、又其後六番島ニ合シ三島連ナリ合シテ一
 島トナル、併セ稱シテ六番島ト云フ、漁人釣ヲ垂ルルニ魚ヲ得ルコト最
 モ多シ、俗ニ惠美須島ト名ヅク、泥島トモ稱ス。
 潮水ノ高溢 安永大噴火後ニ至リテ鹿兒島市街地ノミナラズ、加治木、
 國分等附近ヲ始メ鹿兒島灣北部沿岸ノ地ハ異常ナル高潮ノ災害ニ會ヒタ
 リ、噴火ヨリ四五年目、即チ天明二三年ノ頃ニ及ビテモ容易ニ減衰セ
 ズ、鹿兒島城下ノ下町、築町ノ邊ハ月ノ十五六日潮ノ高ク滿ル時ニハ海水
 市中ニ溢レ上リテ洪水ノ如クニナリ、堤防モ潮ヲ防グコト能ハザリキ。
 「夜九ツ時分(夜半)ニテ候哉燃へ遠炎アカル、初燃出ルハ替リナク火煙

何里トナク、煙ノ内ニ光リモノアリ、且ツ火音ス、初メ燃エ出ルト同時ニ浪アガルコト三丈許リ小池濱邊二丈許リ、白濱村ノ者共相遁レ可申處間モナク靜ニ相成ルニヨリ無ニ其儀ニ砂島大キク相成候」云々トアリ。安永九年十一月三日付ノ島津家ヨリノ届書ハ左ノ如シ。

一先達而御届申上置候私領櫻島燃付近邊海中へ燃出候島々漸々大ク成候モ有之、海底ヨリ火勢強燃出候節ハ大波ニテ近郡田地人家等打潰城下迄モ高汐揚海邊七屋鋪並町家破損所多(中略)當六月御届仕候後八月中迄之損失別紙之通御座候(下略)

(摘要)汐揚屋鋪四百十七ヶ所、汐揚家七百九十八軒、内百六十八軒潰家、六百三十軒半潰」土手道一萬千三百八十間餘、石垣千二百三十七間餘、川筋六百七十間餘。

「夜四ツ前(午後十時頃)ニテ候哉燃へ遠炎アカリ光リモノ有之、大音相聞へ海大ヒニナリ大浪アガリ無間靜ニ相成ル」云々。

「晝七ツ頃(午後四時頃)元高免村ノ前出來島燃上リ泥吹キ上ゲ津浪大ニアカリ、浦之前へ白濱村ヨリ薪採リニ參リシモノ、舟打破リ濱邊ニ居リシ男五人、女一人波ニ引カレ相果タリ、此所ニ漁獵セシ谷山和田濱ノ丸木舟三人乘四人乗ノ二艘覆沒ス、……小池村ノ濱ニ高サ七八間(尺?)程ノ浪上ルコト十度ナリ、又海中ヨリ泥大石上ルコト數不知、白濱村ノ上ヨリ黒神瀬戸村ニテ潮上ゲ、泥交リノ雨トナリテ降ルコト夥シク、泥ノ積ルコト一尺許ナリ」云々。薩摩島津家ヨリノ届書ニヨレバ死人八名行

同 九年十月四日

一七八〇 一〇三一

天明元年三月十八日

一七八一 四一一

年月日	同上(西曆)	記事
天明元年四月八日	一七八一年五月一日	<p>衛不明者七名、怪我人一名、船大小六艘ノ損失アリ。</p> <p>「三月十八日俄ニ燃出最初之燃跡且其邊海中ヨリモ惣體一同ニ如初發夥敷燃立致地震等砂石灰降埋死失等別紙之通御座候、其後小々勢モ薄候處右同所又々致鳴動今月(四月)八日燃出候得共、無程火勢薄相成候」(後略)</p>
同 元年十二月五日	一七八二年十一月八日	<p>「晝七ツ時(午後四時頃)元高免村ノ沖燃上リ小池ヨリ夥シク見ユル」云々。</p>
同 三年八月七日	一七八三年九月三日	<p>噴火(*)</p>
同 五年十月十九日	一七八五年十一月二〇日	<p>「夜九ツ過後平以前ノ燃跡邊ヨリ燃出ヅレドモ、間モ無ク靜マル、瀬戸村ニハ灰降リ、……黒神村ハ輕石少シク降レドモ作方障リナク怪我人ハ無シ」</p>
寛政二年六月十八日	一七九〇年七月二十九日	<p>「夜九ツ時(夜半)御嶽大ニ鳴ル、十九日八ツ時分(午後二時)御嶽大ニ鳴レドモ煙ハ不見、雨不降、霞掛リテ絶頂相分ラズ、十九日ヨリ二十三日マデ灰降ルコト晝夜不_レ止、煙立ツコト無限、島中西瓜、煙草不_レ殘大痛」</p>
同 三年八月十四日	一七九一年九月二日	<p>「晝七ツ時御嶽燃ヘ煙立チ強ク鳴ル、西風吹前平ニ灰降ル、後平黒神邊ハ日中全ク夜ノ如シ、然レドモ別ニ障ナシ、最初燃ノ時ノ通り黒煙卷上夥シク見ユルモ迤ル程ニハ無シ」</p>
同 六年	一七九四年	<p>「連年櫻島燃不止四五月ノ頃隨_レ風數十里間大ニ灰降ル、今秋萬穀大ニ實ル」</p>
同 九年	一七九七年	<p>「夏大飢饉……櫻島ハ灰降テ唐芋一圓實成ナク、粟モ實成ナク櫻島許リ」</p>

同 十一年二月二十二日

一七九九 三二七

萬延元年

一八六〇 | |

明治三十二年九月二十四日

一八九九 九二四

大正三年一月十二日

一九一四 一一二

飢饉ナルモ外郷ハ諸作十分ノ年ナリ

「二月二十二日ヨリ嶽少々煙立灰降、後平ニハ多ク灰降りテ麥作痛ムニ十六七日頃ヨリ夥ク響強ク夜晝不止、三月七日ニ至リテ止ム」

噴火(*)

二十四日及ビ二十五日櫻島ノ絶頂ヨリ凄シク煙ヲ噴出シクルモ格別音響ヲ發セズ又降灰モ無カリキ。(明治三十二年九月二十九日大阪毎日新聞)

大噴火ノ前兆及ビ順序 數年前ヨリ活動シツツアリシ富士帶ノ諸火山中燒岳ハ明治四十四年夏期ニ於テ其ノ最盛時期ニ達シ、爾後一ト先ヅ鎮靜ニ歸シ、大島三原山ハ大正二年春ニ至リ一時全ク休止ノ状態トナリ大正二年末ニ及ビテハ淺間山モ將ニ破裂ヲ終了セントシタリ。次ギテ九州方面ニ火山活動ヲ移シ明治三十七年以來十年間全ク靜止シ有リタル霧島山ノ麓加久藤眞幸等ノ地方ニテ既ニ大正二年五月十九日ヨリ地震ヲ頻繁ニ發生スルニ至リシガ十一月八日ニハ遂ニ霧島山ノ爆發アリ、十二月九日ニ同山第二回ノ破裂アリ、大正三年一月八日更ニ第三回ノ破裂ヲナシ、其レヨリ四日ヲ經テ遂ニ櫻島ノ大噴火トナレリ」櫻島ニテハ一月十日ヨリ地震ヲ發シ十一日ニハ頻繁トナリ島民ハ既ニ避難ヲ始メタリ鹿兒島市ニテモ十一日午前三時頃ニ眠ヲ覺マヌ程ノ地震一回アリ、引キ續キテ地震夥シク、十二日午前六時迄ニ鹿兒島測候所ノ普通地震計ハ三百三十七回ノ震動ヲ記録シタリ。十二日午前八時半頃ニ及ビテハ島ノ南岸脇村有村ノ海濱ヨリ熱湯ヲ噴出セルアリ、有村ノ溫泉ハ三尺モ高ク吹キ上ゲラレ

年月日

同上(西曆)

記事

タリ、而シテ之レニ先キダテ同日未明ヨリ櫻島ハ雲霧ニ閉ザ、レタルモ時々絲ノ如キ白煙ヲ騰上セシムルアリ、午前八時頃ニハ南岳ノ頂上ヨリ白煙ヲ饅頭形ニ上空ニ抛出シタリ、遂ニ午前十時頃先ヅ山ノ西方半腹ニシテ權現祠ノ邊ニ當レル高距約五百七十米ノ地點ヨリ噴火シ次ギテ十分内外ノ時ヲ經テ島ノ東南方ノ半腹、高距約四百七十米ナル鍋山ノ西肩ヨリ少コシク上ニ當レル個所ヨリモ噴火セリ、此等最初ノ噴出ハ格別ニ爆音ヲ伴フコト無カリシモ、其レヨリ次第ニ破裂ヲ強メ、當時無風ナリシヲ以テ煙ヲ二萬餘尺ノ高サニ迄テ直上ニ噴キ上ゲ、黒煙ノ中ニハ縦横ニ無數ノ電光ヲ放射シ激甚ナル燒音ヲ發シ、地震動ハ空氣波ト共ニ間斷ナク、愈々大噴火トナレリ。櫻島有村邊ニテハ十二日午前五時半強震アリ更ニ同日午後六時半頃ニハ鹿兒島市及ビ附近ニ損害ヲ與ヘタル強震アリシガ同日午後十時前ヨリ翌十三日午前十時頃迄ハ主トシテ爆發的時期ニシテ其ノ勢力ノ最盛ナリシハ十三日午前零時乃至一時半ナリキ。十三日午後ニ及ビテハ爆發ハ著ルシク減衰セシガ次ギテ同日午後八時頃ヨリ鎔岩ノ大流出トナレリ。初發ヨリ約二週間ヲ經テ一月二十五六日頃ニ及ビテハ島ノ西方横山方面ノ噴火ハ大ニ勢ヲ減ジ殆ド鎮靜ニ歸シタルモ、東南方面ノ噴火ハ尙ホ頗ル盛ンナリキ、此間ニ西方面ニハ約十二個、東南方面ニ約二十個ノ大小噴孔ヲ生ジ、西方ニ流出セル鎔岩ハ横山村ヲ埋没シ全ク鳥島ヲモ覆ヒテ其ノ存在ヲ失セシムルニ至リ、南東方面ノ鎔岩ハ脇、

有村、瀬戸ノ諸村落ヲ埋没シテ、櫻島ト大隅ノ間ナル瀬戸海峡ニ流入セリ、此海峡ハ元來長サ六百米幅四百米ニシテ中央部ノ水深ハ二十九乃至四十尋ナリシカ次第ニ埋メラレテ一月二十九日ニハ全ク海峡ヲ閉塞シ茲ニ櫻島ハ半島ト變ズルニ至レリ。

鎔岩流及ビ灰ノ容積 西方ノ鎔岩流ハ海中ニ突出スルコト殆ンド十三町ニ達シ、又々東南方鎔岩流ハ脇瀬戸ノ間ニアリタル一〇三米ノ高丘ヲモ埋没シテ、海岸ヲ増シ廣ムルコト千三百米ニ及ビ更ニ海中ニ流下シテ其ノ南方先頭ハ江ノ島ヨリ西方十町内外ノ海底即チ舊海岸ヨリ三十三町ノ距離ニ達セリ、西方鹿兒島海峡ノ水深ハ原來淺クシテ三十尋内外ノ水深ニ過ギザルヲ以テ鎔岩流ガ海中ニ突出シテ留止セル場所ニ於テハ上縁ヲ水面ニ現ハスコト多キモ、有村及ビ牛根麓方面ノ水深ハ大ニシテ七八十尋若クハ九十尋ニ達スルヲ以テ海面下ニ廣大ナル流出區域ヲ形成スルニ至レリ。有村瀬戸方面ノ鎔岩流ノ總面積ハ一、〇〇〇平方里（内〇、五二平方里ハ海面下ノ分）、横山方面ノ分ハ〇、五四平方里ニシテ合計一、五四平方里即チ二十三、七三平方「キロメートル」トナリ、櫻島ノ面積四、五三平方里ニ比スレバ其ノ三分ノ一ニ等シク流出セル鎔岩ノ總容積ヲ推算スルニ一、五六立方「キロメートル」トナル、而シテ又櫻島東部ヲ始メトシ遠近地方ニ落下セル輕石及ビ灰ノ全量ヲ推算スルニ約〇、六二立方「キロメートル」(四百八十立方町)トナル。即チ今回破裂ノ噴出物ノ總量ハ合計二、二立方「キロメートル」トナリ櫻島ノ全容積(海面上ノ分ナリ、海面下

年月日

同上(西曆)

記事

ノ部分ヲ合スルモ格別ノ差トハナラズ)二十六、五立方「キロメートル」ノ約十二分ノ一ニ當ル、若シ此ノ巨量ノ噴出物總量ヲ櫻島全島(東京市ノ面積ト殆ンド相等シ)ニ分布シタリトスレバ約九十餘尺ノ深サニ全島ヲ埋ムルニ至ルベキナリ。

噴火ニ伴ヘル潮位ノ變動 大正三年一月櫻島大噴火後ハ鹿兒島灣ノ潮位(陸岸ニ對シテ)ニ變動ヲ及ボセリ、噴火前明治三十六年乃至三十八年ノ驗測ニヨルニ最高水位ハ八朔ノ高潮ニ際シテモ十一尺三寸ナリシニ、噴火後鹿兒島市海岸ニテハ大正三年三月十三日ノ大潮ニ際シテ既ニ十二尺二寸ニ達シ、同年八月ニ入りテハ十三尺五寸ナル高サトナレリ、而シテ日々ノ潮位干満ノ差ハ別ニ増大セル形跡無キヲ以テ見レバ噴火後異常ナル高潮ハ全ク平均潮位ノ上昇セル結果ナリト考ヘラル。勿論今回ノ潮位變動ハ鹿兒島灣ニノミ限リタルニ非スシテ鹿兒島灣北部全般ト其ノ周圍ノ地域ニ亘ルモノニシテ、潮位ノ上昇ハ櫻島北部ニテハ二米内外薩摩國重富附近ニテハ一米内外ニ達セリ。潮水増溢ノ原因ハ地盤ノ低下ニ歸因シ多量ノ鎔岩ヲ噴出セル爲メ、噴火活動ノ減衰ト共ニ火山内部ニ貯藏セラレタル岩漿ガ漸次沈降スルニ至リ櫻島火山若クハ其ノ附近ノ地下ニ幾分ノ空竅ヲ生ゼル爲ニシテ地盤ノ低下ハ大正三年八月頃ヨリ同年末ニ於テ最大限ニ達シ、爾後少コシク輕減シツ、アリ、約四十年ヲ以テ地盤ハ噴火前ト同様ノ高サニ復歸スベシト推セラル。